

<研究ノート>

## アメリカの金融資本主義と『金融資本論』

### —金融資本と金融資本主義の源流—

坂 本 正

#### はじめに

アメリカの金融資本主義が世界を席卷して、資本主義市場経済は金融資本主義の支配下にあるように見える。それは新自由主義経済のイデオロギーと同義にも見える。その相互関係は吟味が必要だが、それにしてもアメリカ金融資本主義とは何か。その定義も定かではないが、そのように主張する論者の意図が何であれ、筆者もアメリカ金融資本主義の展開に現在の資本主義市場経済の特質と脆弱性をみることにしたい。その際注意すべきことは、アメリカ金融資本主義が金融資本とは異なる新たな金融現象を把握する概念として理解されているように見えることである。確かにヒルファディングが『金融資本論』で提起した金融資本概念とはかなり異なる金融現象に見えるが、それは現代に突如現れたものではない。金融資本研究の視点から言えば、アメリカ型金融資本主義とはアメリカ型金融資本の展開形態で現代の金融・証券化市場の展開の潮流で顕在化したアメリカ型金融資本の国際化である。その勢いは現代のEUにおけるドイツの金融資本型資本主義の構造にも大きな影響を与えている。なぜアメリカ金融資本主義の潮流がドイツ型の金融資本主義の市場経済に影響を与え、世界の資本主義市場経済に再編成を引き起こすような現象になったのか。本稿では現代の金融資本主義の展開とその源流である金融資本の構造分析を通じて金融資本視点から金融資本主義へ展開する要因とその原理的な特質を探ることにしたい。

『金融資本論』の基本構造は、ドイツ金融資本と真逆に見えるアメリカ金融資本主義の特質を際立た

せる理論分析の基本要因を提起するものでもあったのである。

#### 2 ヒルファディング『金融資本論』と金融革新分析—信用制度の構造変化論

ヒルファディングの『金融資本論』は19世紀末のドイツ資本主義をベースに構築された理論体系だが、当時の社会民主党内の最大の論争であった資本主義論争としての農業問題は捨象されていて、ドイツ資本主義分析として体系化されたものではない。その意味ではカルテル関税、独占形成論、信用制度の構造変化に焦点を絞った極めて分析視点を限定した理論的な考察の書物で、それをベースに彼は政治活動を展開するが、その後の関心は組織資本主義に移ることで、金融資本そのものについて特別の研究が深められたわけではない。むしろ活動の理論書としてより平板になっていったように見える。だが、本稿の関心は金融資本から組織資本主義への分析視角の変更の論拠を探ることではない。ヒルファディングはドイツ資本主義の傾向的發展が組織化に向かうと想定してそこに社会主義の基礎となる資本の組織化・社会化傾向をみたのかもしれないが、おそらくその接続となる金融資本分析の特質は「銀行による支産業配」に収斂する彼の論理思考にもみられる。ここでは資本主義の発展と高度化による産業構造の組織化と銀行業の組織化が想定されていて、それは資本主義の組織化と共通するものである。

それは株式市場・金融市場の発展が資本主義発展と信用制度の発展に果たす役割の評価をめぐる論点で、この「金融資本と金融市場」の視点から見ればヒルファディングの論理構成は「金融資本による金

融市場支配」として展開され、そこにドイツ型資本主義構造の特性が強く反映しているとみるべきであろう。これに対してアメリカ型の資本主義は証券市場優位型の独占形成を特徴とし短期金融市場の一部も証券市場での短期取引が代替している。

したがって我々はアメリカの金融資本把握においてこのドイツ型の「金融資本による金融市場支配」を基準に金融資本の特質をみるのではなく、原理論的に構成された「金融資本と金融市場」の関係を基準にアメリカ型の金融資本の特性をみるべきである。それが可能になるのは、ヒルファディングが当時のドイツの金融状況の多様な金融組織と機能が混在して発展を遂げていくいわば混んとして展開する金融革新の基軸にイギリス型とは異なる後進性ゆえの逆説的な展開要素を見出してその信用形態と銀行制度の展開に据えるという「信用制度の現代化」論を理論的に考察するという卓越した分析手法をとったことである。彼の導いた理論モデルは歴史叙述的な現象・事象の理論化ではなくドイツの「信用制度の現代化」を構成する基本要因を抽出して再構成した信用制度の構造変化であり、それが彼の金融革新分析であったのである。金融資本分析は金融機関・金融市場の構成関係については金融革新の展開過程としてとらえられるべきものなのである。

彼の関心はマルクスの『資本論』との理論的な接続での当時の高度な資本主義の構造を把握し、それを彼の革命的な視点で運動の思想的論拠を与えようとしたものと考えられるが、それが党内屈指の理論家としてどのように彼の政治方針に活かされ活動の成果に結びついたかは明らかではない。だが、その政治活動と金融資本分析の有効性の論点は此処ではおくとして、彼の提起した金融革新としての「信用論の現代化」は金融資本分析と金融資本主義分析に大きな示唆をもつものである。これはヒルファディング研究において今まで提起されてこなかったが、ドイツだけでなくアメリカも視野に入れた共通の金融資本分析においては極めて重要な分析視角である。

周知のように彼の理論体系は金融資本概念の導出を規定したうえで独自の独占論を展開して経済政策論を展開するその壮大な体系化にはただ驚嘆するほかないが、彼の分析の卓越性は貨幣・信用論体系とし

て金融資本概念導出に至る彼の方法論にある。この金融革新分析視角が現代の金融資本主義分析にかなる示唆を与えるかについて再考することにした。

筆者はすでにこの論点についていくつかの試論を提出しているが、それは現代に進展しているアメリカ型の金融資本主義の展開がドイツ型の金融資本といかなる関係にあるかについて、『金融資本論』がアメリカ型金融資本主義の源流でありであり、いくつかの理論的要素から見れば金融資本主義は、金融市場をベースにした金融資本の派生・分岐の統合形態であり、その総合的な観点から現代の金融資本主義の世界的な優越性をとらえるべきでないかと考えている。そのためにはドイツ金融資本主義の金融制度論の特徴をアメリカの金融制度論との比較で検討しその中で展開されてくる金融資本主義の生成と展開過程の考察が必要であるが、本稿ではその関連については問題提起にとどめ、それらを視野に入れてこれまでの試論を再構成し、金融資本の基本的な構成要因を再点検するとともにその構成要素に基づいてドイツ金融資本とアメリカ金融資本の共通性と異質性を摘出する。証券市場優位型の産業構造から形成されたアメリカ金融資本はその特質を発展させ、現代の金融革新のもとニューヨーク金融市場の国際化への展開によって独自の金融資本主義へと展開するのである。

### 3 金融資本と金融革新

1) ドイツの資本主義分析についての考察は多いが、ヒルファディングの理論的な関心は当時の急激に進展する金融革新として現れる銀行制度の構造変化や形態転換の分析とその理論構造の把握にあったように思われる。銀行制度の行動変化についてはヤイデルスが実に詳細な分析を行っていて、その研究がヒルファディングに多大な影響を与えたことが知られているが、それが『金融資本論』の構成と分析にどのような影響を与えたかは、必ずしも明らかではない。『金融資本論』は当時の時論としては金融革新分析の視点から考察されねばならないが、ここでヒルファディングが得た着想はドイツ特有の交互計算業務の詳細な把握にあった。交互計算業務がド

イツ金融史の成果としてそれがいかに枢軸的な位置を占めているかが明らかであるが、ヤイデルスの極めて綿密で資料実証的な研究は当時のドイツの銀行状況について考察すべき多くの論点を提出している。そこには銀行と産業との関係において支払い信用の多様な事例が列挙されていて、それらをどう整理するかが銀行と産業を取り結ぶ信用制度の課題であった。

ヒルファディングにとって、これこそが信用論との組み合わせでいえば「銀行と産業の緊密化」の歴史的な事象であり、この歴史的な事象をいかにマルクスの信用論の系譜の上に理論的に再構築するかという課題設定をしたと思われる。

ヒルファディングはこの眼前で展開するドイツ型金融革新をベースにヒルファディング流の信用論の構築に向かうのである。彼は、その理論化にあたってドイツの現状に合わせて抽象的な〈信用範疇の現代化〉を試みたのであり、それは交互計算業務を把握するための信用範疇の再構成であった。特に長期貸付の展開はその貸し付け源泉をどのように析出するかが検討課題となり、手形支払いの流通部面の信用形態がどのように産業への融資へと展開できるのか、そのためには従来の商業信用をさらに展開させる銀行業が必要でそれは貨幣取り扱い資本を基礎に貸し付けをする利子うみ資本の展開が不可欠であり、それに向けて銀行信用の原理を利子うみ資本の運動に求め、流通部面の商業信用から産業融資を積極的に行う銀行信用への展開を図った。銀行信用は商業信用を代位するものであるが、ヒルファディングにとって銀行信用は商業信用の限界を打破して流通範囲を拡大させるものだけでなく、銀行業としての銀行信用は産業融資を進める利子うみ資本の運動を行うものでその独自の銀行業の自立化として展開されねばならないものであった。ヒルファディングは、この利子うみ資本としての銀行の自立化を信用制度論の基礎に据えて信用範疇の再構成を行い貨幣・信用論の上向方法に即して、〈商業信用—銀行信用〉の内容を〈流通信用—資本信用〉の〈信用範疇の現代化〉として再構成したのである。彼は〈商業信用—銀行信用〉の信用範疇を否定したのではなく、〈貨幣取り扱い資本—銀行業〉の銀行業の自立化の論理を信用体系に入れ込み、利子うみ資本の自

立化運動としての信用論の再構築を試みた。ヒルファディングの信用論はこの観点から再評価されるべきものなのである。

2) ヒルファディングは複合的で見ようによっては乱雑に進展するドイツの金融状況の変化をどのように捉えたのか。その当時発券銀行のライヒスバンクを頂点に発券銀行、地方銀行、ベルリン大銀行が入り混じって銀行業務を展開し、その他多種の金融機関が産業金融に参画していた。その業務には手形流通の信用関係を受けて新たな銀行が多様に展開する産業金融の多様な現象が信用制度を構成していた。その中で資本主義の発展を支える原動力となる銀行業をおこなう金融機関は何でその銀行が担う信用の未来を拓くモメントは何か、それを峻別し信用論として再構成する分析基準をどこに置くか、ヒルファディングはマルクス以後の「信用理論の現代化」に取り組んだのである。

その理論分析に示唆を与える信頼できる詳細な資料分析を学術的な書物にまとめ挙げたのがヤイデルスであった。

ヤイデルスは、当時の銀行状況をめぐる産業との信用関係についても多くの論点を列挙している。

ヤイデルスは産業的銀行業務において、(1) 産業が何のために信用を用いるのか、(2) 産業はいかなる形態で信用を獲得しうるのか、(3) 産業は信用を誰から受けるのが最もよいのか、の問題提起をして、産業の資金需要について経常的な経営の維持問題と新規工場設備資金の課題について2つの貨幣調達として正規の銀行業務と証券業務に踏み込むルートがあることを指摘し、支払い媒介、支払い信用、当座勘定、振替勘定、手形、小切手の部面での信用機関と産業の関係に加えて更に経営維持と新規設備投資を取りあげる。ここで2つの銀行活動が前面に出ることになり当座勘定信用と、証券発行が求められる、小規模信用には当座勘定信用が対応し新規設備には証券発行が必要になる、との業務区分をした。「フィリボヴィッチによれば、設備信用と経営信用の本質は、この両者にあつては『生産を開始するための貨幣資本および貨幣資本の商品資本への転化が目標とされる』点に存する。『商品資本の貨幣資本への転化にとっての問題である』支払い信用とは反対である。」

こう指摘して、具体的な銀行信用、当座勘定信用、社債発行、株式資本、信用機関、中央発券銀行としてのライヒスバンク、発券銀行、個人銀行、株式銀行、近代的様式の本来の信用銀行、個人銀行、株式銀行、純粹の産業銀行、証券銀行を上げ、産業的信用業務に対する銀行業務の区分として、発券銀行の支払い信用、信用銀行の支払い信用、経営信用、設備信用を挙げたうえで内容の詳細については資料が不十分で当座勘定によって与えられる典型的な産業的銀行信用を機関別の規模でその性格まで把握することは全くできなるとまで断じている。そこで実態把握の分析ではなく信用形態の一般的形態分析に主眼を置いて、支払い信用手段の振替勘定の繰り越し、小切手、手形について分析を行い、産業に対する信用授与について手形割引の分析を行っている。

そして交流しつつある産業との関係において銀行業も集中化傾向を示しているが、そこで新たな展開としての証券発行や創業と並んで産業的銀行業務である当座勘定信用に言及する。そして産業的銀行信用を通じた産業側との関係で緊密化と銀行側の経営知識や監視が必要になるが、それは企業側からの創業や増資へ要求に対応して多額の資金を処理する必要が生まれ当座勘定取引を拡張しなければならなくなるからであった。そしてその結果ベルリン大銀行では当座勘定の債務者の大きな部分が取引所に求められるという新たな関係が生まれる。当座勘定業務、銀行信用、取引所との関係が生まれる中で銀行と産業との永続関係が生まれ、銀行は創業から緊密に関係を持ち産業を支援しながら利得を得ることが求められる。銀行間の競争で地方の銀行業者が駆逐

され大銀行による銀行の集中が進むが、証券発行業務にも発展の契機を見出し貨幣市場、取引所と関係を強め、危険分散のために自己資本増大を強め、産業に対する信用の拡大に努める。こうして大銀行が産業的業務の完全機関としての位置を占めるようになる<sup>1)</sup>。

3) ドイツ金融革新の最大の現象はモデルとなるイギリスの商業銀行制度とは全く異質の証券・株式市場が狭隘な状況で、銀行制度が株式市場を内包化して発展する兼営銀行の展開であった。ドイツにはイギリスにみられる株式市場の発展とそれに応じたマーチャント・バンカーのような特殊な金融機関と短期の銀行間の小切手を交換するクリアリングハウスに支えられた短期金融市場を内包した商業銀行制度は存在しない。極めて流動性の低い市場で、銀行制度自体も個人銀行が強くヒルファディングが想定する兼営銀行はベルリン市場のベルリン大銀行で彼はそこにドイツ銀行制度の発展モデルをみたのである。それはドイツの銀行が制度として兼営銀行化するというモデルではなく最も発展した銀行のモデルがベルリン大銀行であったとみるべきであろう。しかし、その場合もイギリスのような株式市場と商業銀行が一定程度分離して機能を果たす分業型金融制度ではなく、大銀行が株式市場をいわば包摂し、銀行の資産の流動性のために株式市場を活用する株式取引所の取り込み化現象が進む現実をヒルファディングはモデルとしたのである。

資本主義の新しい現象は過渡的現象や資本の社会化装置としての株式会社・株式市場ではなく、現実の大銀行の資産の流動機構として銀行の制度改革と金融革新を推し進める最新の信用機構であった。金

1) 『金融資本論』については、cf. Rudolf Hilferding, *Das Finanz Kapital* [Marx-Studien] Verlag Der Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brad & Co. 1910, 邦訳：ヒルファディング・岡崎次郎『金融資本論(上)』岩波文庫、1955 [1976]、参照。ヤイデルスについては、cf. Dr. Otto Jeidels, *Das Verhältnis der deutschen Großbanken zur Industrie mit besonderer Berücksichtigung der Eisenindustrie*, ; "Das industrielle Bankgeschäft," Leipzig, Verlag von Duncker & Humboldt, 1905, O・ヤイデルス/長坂 聰 訳『ドイツ大銀行の産業支配』〔『とくに製鉄業の考察を中心にしたドイツ大銀行の産業に対する関係』〕勁草書房、[1984] 1985年7月、第一章 産業的銀行業務。邦訳に『ドイツの大銀行の産業支配』としているようにヤイデルスが考察したドイツ大銀行と大企業との実証研究がヒルファディングの「銀行による産業支配」の歴史的な裏付けとなっていると考えられる。しかし、その実証はヒルファディングの理論のモデルあるいは理論の結果を示すものであって、彼の金融革新分析の理論的な内実を示すものではなかったのである。

金融革新の視点から言えば株式会社・株式市場は新たな信用制度の展開装置であり、信用制度論として明確に把握されるべきものであった。

そして金融革新の過程で進展していたのが産業の独占化であり、資本の集中・集積であった。これは新たな高度資本主義を特徴づける基礎となる現象でこれまでの資本主義の発展と時代を画す画期的な構造変化である。したがってヒルファディングは産業構造の展開と独占化を分析の軸に据えたが、産業間の資本結合論としてそれを分析の起点には据えなかった。それでは単に独占論としてマルクスの『資本論』からの連結が説かれるにしても新たな資本主義現象としての金融革新は後景に追いやられ彼が意図した考察が出来なくなる。彼は金融革新と産業独占の両面から新たな資本主義を考察しようとしたのである。

金融革新の視点から信用制度の構造変化を分析の軸に据えたことで、ヒルファディングの独占形成論は資本の結合論としてではなく資本の結合の前提となる個別資本の増大と巨大化はどのように形成されるのかがテーマとなった。独占が新しい資本主義の画期的なメルクマールとするとその独占化は、単なる言葉としての資本の集中・集積の結果として突然に析出できるものなのか。多くのヒルファディングの『金融資本論』批判の論者が分析の起点に独占論を説いていないことを上げ、流通主義というわかりにくい批判理由を挙げることが多いが、資本主義の発展がどのように必然的に個別資本の増大を生み出し巨大化するのか、なぜ必然的に独占化するのか、ヒルファディングの関心はその資本の必然性を理論的に解明し説明することにあった。

彼がその装置として着目したのが株式会社の二つの機能であった。それは資本結合組織体として最も高度な装置であると同時にそれを可能にする資本調達機能で、これまでにない特質はそこにあった。その資本調達機能は株式会社組織に固有なものであったが個別の株式会社が個別に保持するに機能ではな

かった。それまでの資本結合組織との決定的な違いは個別の企業組織であっても資本調達は個々の株式会社が共有する株式市場を通じて行われるもので資本の社会化が前提であった。株式会社そのものは資本主義の発展とともに古くから存在し株式流通市場の展開が会社の資本結合と発展を促してきた。だがその自由主義段階に発展してきた株式会社・株式市場が独占化に向けて大きな役割を果たすのであり銀行制度の構造変化としての兼営化を促す要因なのである。

そこでこの株式会社の資本結合機能と資本調達機能をどのように位置づけ、理論化するか、が新たな資本主義把握の枢要軸となったのである。アメリカの金融資本の分析に際して資本結合を議論の軸に据えその株式会社での資本結合のメルクマールを株式資本にする手法もあるが、株式資本は抽象的な理念やメルクマールではなく、独占化を具体的に進める市場のメルクマールに他ならない。マルクス株式資本の抽象的で理念的な面ではなく具体的に資本結合を制度として保証する市場が株式市場であり、その具体的な資本範疇が株式資本である。

ヒルファディングのこの金融革新的分析手法は株式会社の組織の二重性を軸に据えそれによって初めて信用制度論的な分析と独占分析の二つの新たな論理系譜の展開を可能にするものであった。そしてその金融革新の視点から独占論も信用制度論的に資本の流入をベースに展開されるのである。その結果として、金融資本が析出されるのである<sup>2)</sup>。

## 2 アメリカの金融資本と金融資本主義

アメリカの金融資本はドイツとは違って株式市場優位型の資本構造の下で展開され企業独占も巨大な規模で展開されるが、金融資本形態はドイツの商業銀行の兼営化ではなくニューヨーク金融市場をベースにしたJPモルガンに代表される投資銀行優位の産業支配であり、投資銀行を頂点とする商業銀行を

---

2) 坂本 正「ドイツ金融資本とアメリカ金融資本主義の基本考察—(株式資本と金融市場) 視角と金融資本主義の源流—」熊本学園大学『海外事情研究』第52巻(通算97号)2025/3、参照。本稿はここで提示された視点を展開したものである。

組み込んだ証券引き受けシンジケートが総体としての投資銀行・商業銀行優位の産業支配構造を生み出すのである。

時代区分あるいは段階概念として独占を基礎に金融資本は考察されねばならないが、金融資本の特質はその独占の形態だけにあるのではなく、投資銀行・商業銀行総体としての金融機関の支配形態にそのメルクマールを置かねばならない。その投資銀行に代表される金融機関の産業支配は投資銀行の発行業務を通じてなされるもので証券優位の金融資本である。アメリカ型金融資本主義はこのアメリカ型の証券市場優位型金融資本の展開として独自の発展を遂げるのである。

ヒルファディングが『金融資本論』を構想していた時、彼が念頭に置いていたのはドイツの金融状況の急激な変化でそれを金融革新として把握した。彼はその内容をどう把握したのか、どのような資料をベースに研究をしたのかは明らかではないが、ヤイデルスの書物でその激動期の事実を理解したと思われる。その点の影響についてヒルファディングは明らかにしていないがヤイデルスの列挙した多くの論点は彼の理解を深め、マルクスの原理的な信用分析をベースにその現代化に向けた新たな信用論の再構築を試みたといつてよいであろう。

そのうえでその体系化に向けて銀行業の取り組んでいる交互計算業務を軸にした産業銀行業務の内容を段階的に整理し、信用範疇を流通信用と資本信用に区分した。その狙いは新たな金融革新に対応した銀行信用の産業金融の高度化、つまり産業の発展に応じた長期貸付とそれに関連する創業や株式銀行の在り方、証券発行業務とのかかわりを統一的に把握しようとしたのである。それに対応するためには銀行業そのものの体質を強化すること、長期貸し付け、証券発行、創業支援に関わるには銀行が企業の状態を正確に把握すること、支援と同時に監視するという緊密化が重要な視点になる。この緊密化を信用論・信用制度論として把握し、展開することがヒルファディングの設定した課題であった。このヒルファディングの設定が必要であったのか、無用なものであったのか、これまでのヒルファディング研究はこの点を明らかにしてこなかった。多くの論者はマルクスの商業信用、銀行信用の理解に基づいて流

通信用、資本信用の批判的検討をしてきた。また流通信用、資本信用の有効性を論じることも少ない。そのうえ、固定資本の増大に対応して銀行信用がどのように展開すべきかの試みも少ない。信用制度論的に株式会社を把握する議論も提起されたが、その視点から株式会社が資本の集中・集積と独占化にどのような役割を果たしたのかの展開はされてこなかった。ヒルファディングの問題提起は今なお古くて新しいテーマなのである。

彼の信用範疇の構築とその信用制度論的な展開のアイデアがどのようなものか、その思索メモなどがないため我々が判断できる素材としての有益な最大の材料はヤイデルスの文献で、『金融資本論』研究の必須文献として長く参照されてきたものであるが、その観点からの信用制度論の必要な論点提示とその再構成に向けた具体化の過程は明らかではない。しかし、ここにヒルファディングが取り組もうとした内容は提示されている。ヒルファディングが理論構築に取り組む時期にヤイデルスの書物が1905年に出版されるので、彼はある程度の構想を持って取り組んでいたアイデアの確証をこの書で得たのかもしれない。だがここで列挙されているのは現象に過ぎないので、これを理論構成したアイデアの豊かさには驚かされる。

彼はヤイデルスが理論的に想定していなかった〈金融市場・株式資本〉と〈信用制度としての株式会社〉を軸に〈擬制資本・創業者利得〉を析出するのであり、この新たな分析視角がヤイデルスの業績を高度な資本主義の信用制度論の体系に位置づけることになり、金融革新としての金融資本分析の体系化を果たすことになったのである。

アメリカ金融資本は証券市場優位型のいわば投機型資本主義としての特徴を持ち、ドイツの兼営銀行による安定的な証券市場を取りこんだ金融構造ではない。19世紀末のアメリカは国法銀行、州法銀行の2重銀行制度の中で20世紀初頭にかけて信託会社の商業銀行化による兼営化傾向や、巨大信託会社の破たんを引き金に1907年銀行金融恐慌が引き起こされるが、JPモルガン商会が銀行を組織して銀行間決済のクリアリングハウス証券の発行で金融恐慌を鎮静化させるが、その時、JPモルガン商会は証券発行業務を通じてトラスト形態の産業独占の

支配者であった。証券市場優位型のアメリカで「擬制資本—証券発行」部面での「投資銀行による産業支配」がアメリカ型金融資本の原型である。JP モルガン商会の産業支配構造は、マネートラストを形成し経済発展の原動力になった。他方、シカゴがヘゲモニーを握っていたアメリカ銀行業界の勢力図もニューヨーク中心へと大きく変化し、ニューヨーク金融市場を中心に JP モルガン商会の投資銀行群とニューヨーク銀行群が、総体として産業界に影響を及ぼすが、JP モルガン商会を頂点とする引受シンジケートは商業銀行を組み込んで編成されるので、「投資銀行・商業銀行の複合的な金融機関による産業支配」がアメリカ型金融資本と言ってよいであろう。

だが、1933 年銀行法によって銀行と証券が分離され投資銀行と商業銀行は資金的な連携を持ちながらも業務区分の中で発展を遂げることになる。しかし、このことは2つの重要な変化をもたらすことになった。それは1933年銀行法がアメリカ金融資本から金融資本主義への旋回軸となる契機になり、FDIC が提起されたことで銀行制度の安定保証システムができたことである。この傾向は1935年銀行法によって確定されることになったが、アメリカ金融資本の2つの道が開かれた。一つは商業銀行がタームローンによって産業との緊密化を生む一方、投資銀行は擬制資本を通じた産業との支配形態を進めるのである。アメリカの金融資本の展開はドイツの金融・証券市場包摂型の金融資本と違い、金融証券市場促進型の金融資本として、金融市場の発展を媒介にした商業銀行の緊密型金融資本と国際金融市場の発展を軸にした国際金融市場型金融資本の2つの金融資本の発展形態をとるのでその複合体として金融資本を把握すべきである。

「緊密化と産業支配」、「擬制資本と産業支配」はドイツの場合は兼営銀行システムで統合化されるが、アメリカ金融資本は2元化された金融資本の総合化なので、「緊密化と産業支配」の側面の金融資本のみに注目すべきはないのである。

現代において投資銀行と商業銀行の競争によって金融機関競争が激化され、現代の金融革新のグラス＝ステイーガル法の事実上の撤廃によってアメリカ金融資本は投資銀行主導の国際金融市場型金融資本

へと再編成され、ニューヨーク金融市場の発展の国際化によって投資銀行主導の金融資本主義へと成長を遂げるのである。

後発の資本主義として急成長したアメリカは現在基軸通貨ドルを背景に、新自由主義の金融資本主義として世界市場で優位な位置を占めている。後発であるためイギリスをモデルに教科書的には商業銀行と投資銀行の分離で金融制度の輪郭を描くこともあったが、アングロ＝アメリカ路線でイギリスからの影響を強く受けたものの現実には独占形成期には圧倒的な証券市場優位の経済構造で金融資本を形成するのである。そこでは JP モルガン商会を中心にしたニューヨーク市場を背景とする投資銀行による産業支配の金融資本を形成し、ロンドン金融市場に対抗する国際金融市場の一翼を占める金融寡頭制的な金融資本を形成する。イギリスの金融本が国際的金融市場としてのロンドン金融市場を背景に発展を遂げるとはいえ銀行と産業の支配関係が希薄であるのに対して、アメリカ金融資本は銀行の産業支配の関係が強力であること、その支配的地位にある JP モルガン商会が1913年連邦準備法形成の時期まではそれまで主流であったシカゴ銀行業界から銀行業界の覇権を奪還して中央銀行的な役割を果たし、またそれを期待されていたこと、外交においても政府に代わって国際金融のネットワークを背景に政府の代行をし得る立場にあったことから、アメリカの金融寡頭制の位置を占めるに至った。後発資本主義のアメリカは制度的な脆弱性を安定的な秩序へと整序させるのではなく結果としてシステムの正常化を求める投機型市場経済に対応する投資銀行型金融資本として商業銀行を包摂する独自の発展を遂げた。したがってモデルとしてのイギリス型銀行制度とは大きく異なるリスクテイキング型の商業銀行とその商業銀行を証券引受シンジケートの編成に組み込む投資銀行型金融資本は、ドイツの大銀行支配型の金融資本とも大きく異なることになったのである。

ヒルファディングの規定した「金融資本」とその形成基盤が大きく異なるが、金融資本の構成要素はアメリカにおいても満たしている。大きく異なるように見えるのだとすれば、それは金融資本分析において独占を重視し独占資本主義として整理するか、銀行と産業の融資関係にのみ焦点を当てヒルファ

ディングの規定に対応させようとしてかえって相違点が顕著になるためである。必要なことはヒルファディングの規定がその方法分析として定めた〈株式資本と金融資本〉視角からの分析と比較である。この観点に立てばドイツ金融資本もアメリカ金融資本も〈株式会社と株式会社〉を軸に金融資本が構成されるその共通性に注目すべきなのである。問題は独占を基礎にした銀行による産業支配形態において株式市場・金融市場が産業支配にどのような相違をもたらすかである。ドイツ型金融資本では銀行が証券取引所を銀行内部に取り込み、銀行内の内部決済と資金の流動化装置として金融市場が位置するのに対してアメリカ型金融資本は金融市場優位型の金融資本形態をとり、金融市場の発展によって金融資本が展開するのでこれを金融市場型金融資本と呼ぶ。一般的にはその金融市場の展開が前面に出るためその展開に着目して金融資本主義と呼ばれるのである。その銀行と産業の支配関係は独占期の時よりも緩慢であるが、投資銀行・商業銀行と産業の資金関連は強いのであり、その投資銀行・商業銀行と産業との関連をベースに金融資本市場・証券化市場の展開がなされるのがアメリカ型金融資本主義なのである。この金融市場型金融資本としての金融資本主義はその根源に投機型資本主義を内包する極めてリスクテイキングな行動様式をとる。したがってドイツ金融資本主義と対照的なことから、アメリカ型金融資本主義は金融資本とは別のルートで近年登場したかのように見えるが、それはアメリカ型金融資本の展開過程で顕著になった金融市場優位型金融資本の現代化なのである。

しかも現代の金融資本主義はアメリカの基軸通貨ドルを背景にした国際金融・証券市場の中心で他国の金融市場を巻き込んでその展開を加速させてきた。と同時に各国の金融資本はアメリカ型の金融資本主義の潮流に巻き込まれることになったのである。金融資本研究は各国ごとの類型分析で特質を分析しその比較によって対立と共通項を探る試みをしてきた。筆者は、その方法論と成果を踏まえ独占期をベースに形成された金融資本はヒルファディングの『金融資本論』をベースに独占と銀行の緊密化と産業支配を構成要素に析出してきたが、その共通項を〈金融資本と金融市場〉の観点から再構成し、そ

の分析の視点を〈株式資本と金融市場〉の在り方に定めるべきだと主張したい。ドイツ型金融資本は現代においても有効な銀行・産業分析であるが、そこで明らかになっているのは狭隘な金融市場のいわば銀行管理強化が前面に出た銀行による産業支配構造である。ドイツの兼営銀行は堅実な方法で産業育成を行う優位性があるがアメリカ型金融資本主義の国際的な証券化金融市場の潮流において隔絶して独自の金融資本システムを維持するのは困難である。兼営銀行型での銀行の近代化と展開をするためには銀行と証券の業務分担の比率と経営方針が重要になる。これが、現在の金融資本とアメリカ型金融資本としての金融資本主義と対比と分析の視角である。その基軸通貨ドルの優越的位置と国際金融市場の構造の下で金融資本と金融資本主義の比較は、単なる個別分析の総合化として考察するだけでは十分ではないだろう。各国の金融資本はその国の銀行・金融市場・産業構造の歴史的な特質に規定されるものであるが、その対比と分析を困難にしたのはヒルファディング当時と比べてアメリカの経済発展と信用制度の構造変化、金融市場の発展の度合いが急激で金融資本構造を囲む制度環境が急激に変わりすぎたためである。

## 結びにかえて

後発資本主義のアメリカはドイツで金融資本の定義がなされた時には、ドイツとはかなり異なる巨大な独占形成と投資銀行に代表される金融機関の産業支配形態を持っていた。ドイツ型金融資本とアメリカ型金融資本の共通項は証券市場を通じて金融機関が産業を支配する点にあった。ヒルファディングの卓越性は原理的に証券市場、株式資本、創業者利得を分析したが、それはアメリカ型金融資本の特質を分析するツールでもあった。だが、違いはヒルファディング型の金融資本が兼営銀行による金融市場支配によって金融市場が兼営銀行に取り込まれるのに対して、アメリカ型金融資本では金融市場がさらに発展し投資銀行業が商業銀行との連携のもとに産業支配を進めた。商業銀行による産業との融資関係の緊密化も見られる一方で、他方では投資銀行がその連携金融機関との総体で金融寡頭制ともいえる国際

金融市場での優位性を示しつあった。そうした多面的な金融市場を軸にしたアメリカ型金融資本の展開形態が、近年のアメリカ金融資本主義の展開となった。それはかつてのヒルファディング型金融資本の痕跡がみられないほど独自の発展形態を示している。したがってアメリカの金融資本の研究が多くの成果を上げながら現代のアメリカ金融資本主義との関連を問えないのは、独占形成、産業と銀行の緊密化、金融市場と投資銀行・商業銀行、金融革新の進展を組み合わせる金融資本を総合的に捉える視点が希薄であったためである。その金融資本構成の組み合わせで特に注目すべきは近年のアメリカの金融・証券化市場の進展に即した金融革新の進展である。

実はここにアメリカ型金融資本が金融資本市場化を遂げ、その国際化によってドイツなどの金融資本型金融機関をアメリカの金融・証券化市場に巻き込みリーマンショックではドイツ銀行の証券業務に痛手を負わせることで大きな打撃を与えている。しかし、それはアメリカ金融資本主義の勝利というだけで進展するのではなく、一方で産業と銀行の緊密が希薄になり金融資本主義がアメリカ経済の主流になることで従来型産業の空洞化が引き起こされ国際競争力が低下するという脆弱性を抱えこむことになった。アメリカにおいてアメリカ型金融資本とアメリカ型金融資本主義への2分化傾向に現代資本主義の危機の源流があるというべきであろう。

